

NEWS

2002.6 ~ 2002.9

国際文化交流 シンポジウム開催 奏楽堂から 世界的世論の喚起

アフガニスタン文化支援へのメッセージ 国際シンポジウムから

前田耕作

平 成十四年七月二十九日、アフガニスタンの貴重な文化財保護に関する世界的な世論の構築に資するため、国際文化交流シンポジウム2002「アフガニスタンの文化 東西文化交流と仏教文化」が奏楽堂において開かれ、約九〇〇人が参加した。

大学院音楽研究科学生による弦楽四重奏の奏楽で始まり、平山学長、松浦ユネスコ事務局長の主催者挨拶、遠山文部科学大臣、松浪外務大臣政務官、ラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣の祝辞の後、外国人留学生による民族音楽と踊りが披露された。

プログラム

第1セッション

基調講演：平山郁夫（東京芸術大学長）

松浦晃一郎（ユネスコ事務局長）

ジャン・フランソワ・ジャリージュ

（フランス・ギメ国立東洋美術館長）

第2セッション

テーマ：東西文化交流とアフガニスタンの仏教文化の展開

コーディネーター：前田耕作（和光大学教授）

発表者：ポール・ベルナル（フランス学士院会員）／ゼマルヤライ・タルジ（ストラスブール大学教授）／宮治昭（名古屋大学教授）／田辺勝美（中央大学教授）

第3セッション

コーディネーター：前田耕作教授

パネリスト：ピエールカンボン・ギメ国立東洋美術館部長／タルジ教授／ベルナル氏／土谷遥子（元上智大教授）／宮治昭教授／田辺勝美教授

主催 東京芸術大学、ユネスコ、日本ユネスコ国内委員会、社団法人日本ユネスコ協会連盟、朝日新聞社

後援 外務省、文化庁、NHK、文化財保護振興財団、芸術研究振興財団

協力 国際交流基金、全日空、全日空ホテルズ、電通

運営

運営諮問会議を開催

六月二十八日、平成十四年度第一回運営諮問会議を開催し、議長、副議長を再選出した。国立大学を取り巻く現状が説明されたのち、本学における大学改革の推進について活発な意見交換が行われた。

議長

樋口 廣太郎

アサヒビール（株）
相談役名誉会長

副議長

鳥居 泰彦

日本私立学校振興・
共済事業団理事長

海老沢 勝二

日本放送協会会長

交流

スミソニアンと交流協定 締結

七月三十日、米国スミソニアン機構のフリーア美術館との間に交流協定を締結した。今後は、両者間に調整委員会を設け、研究者交流などの事業を進めていく予定。

受章・受賞

山本邦山教授が人間国宝

七月八日、山本邦山教授（邦楽科尺八）は、重要無形文化財保持者（人間国宝）として認定された。

二〇〇二年一月、アフガニスタンの復興を支援する東京会議で世界各国はそれぞれ具体的な支援内容を発表した。日本政府は「難民の再定住、地雷除去、医療、教育」など復興に向けて不可欠なプロセスと未来を担う人づくりに支援の重点を置くと表明した。

フランス政府は「教育、保健、農業、国家再建、市民社会支援、文化遺産の保護」の六部門を支援対象と特定し、春、すぐさ

ま調査団をアフガニスタンに派遣した。とりわけ緊急性を要する文化遺産の保護に関しては六名の専門家たちを現状調査のため五月初旬に現地に送り、五月末にカブールで開催された「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」に備えた。この対応の素早さは、文化復興が和平プロセスのなかで果たす役割の重要性を深く認識するフランスならではのものではあった。

カブール会議の主要な目的は、アフガニ

スタン国内の文化遺産、遺跡、博物館の現状に関する情報の交換と、緊急および長期の遺産保護を目的とする対策の骨子の策定であった。国内文化遺産の目録作成、カブール博物館復興計画、バーミヤン仏教遺跡の保護などが最初の実行計画に盛り込まれた。

平山郁夫学長は日本からただひとりユネスコ親善大使としてこの会議に加わり、バーミヤン遺跡の修復、現地に資料館を設置することと当地における考古発掘の推進、バーミヤン、カクラク、フォラディの石窟のある三つの谷を環境もとも文化ゾーンとして保存・保護することの重要性を主張



日米仏 国際交流懇談会開催

七月三十日、東京全日空ホテルで日米仏三カ国の美術館等の関係者からなる「国際交流懇談会」を主催した。

懇談会では、本学学長を議長として考古資料から現代美術にいたる幅広い文化財・美術品の保存修復を中心とした現状と、人材育成や国際交流事業実施に際しての事前の情報交換やコミュニケーションの重要性などについて活発な意見交換が行われた。特に美術品の収集や保存方法が各国共通の課題として浮かび上がった。

また、このような交流の機会を重ねていく必要性について意見の一致をみた。



された。

二〇〇二年夏、東京芸術大学で開催された「アフガニスタン 悠久の歴史展」と「アフガニスタンの文化 東西文化交流と仏教文化」をテーマに掲げた国際シンポジウムは、こうした大きな歴史的うねりを積極的に受けとめて、日本が文化にかかわってアフガニスタンの歩みに深く足を踏み入れる初めての試みであったといえよう。それはまた、越境的な眼差しなくして文化など語ることはできないことを学ぶ機会でもあった。シンポジウムに参加したフランスのパネリストはすべてカポール会議に出席したメンバーであり、アフガニスタンをフィールドとしてながく活躍してきた学究たちであった。彼らはヘレニズムから仏教にかかわる遺跡までを広く深く論じつつ、複合的なアフガニスタン文化の独自性と普遍性をきわめて具体的に語った。アイ・ハヌム遺跡を発掘

出席者

河合隼雄（文化庁長官）／野上弘（東京国立博物館長）／佐々木正峰（国立科学博物館長）／樺山紘一（国立西洋美術館長）／辻村哲夫（東京国立近代美術館長）／平山郁夫（学長）／宮田亮平（美術学部長）／高橋大海（音楽学部長）／竹内順一（大学美術館長）／ジャン・フランソワ・ジャリージュ（ギメ館長）／キャサリン・ジャリージュ（考古学者）／ピエール・カンボン（ギメ美術館館長）／尾本圭子（ギメ美術館図書館司書）／ゼマルヤライ・タルジ（教授）／ヤニック・ルー（エコールボザール学長代理）／ペロニカ・ラバリ・ガル（同国際部長）／ジュリアン・ラビ（スミソニアン機構・フリーア美術館長）／ジェイムズ・ユーラック（同日本美術主任研究官）

したポール・ベルナル氏の驚くべき発見、かつてアフガニスタン考古研究所の責任者としてハッダの仏教遺跡の科学的発掘の指揮をとったゼマルヤライ・タルジ氏の仏像の起源をめぐる言説などが印象的であった。日本側はバーミヤン遺跡を中心としてそれぞれ個性溢れる議論を展開して気を吐いた。プレゼンテーションを含んで四時間におよぶ長いシンポジウムにもかかわらず、多くの人たちが変転するアフガニスタンの歴史にじつと耳を傾け、その文化の多様な姿に熱く心をゆさぶられていた。そして参加したすべての人が、このシンポジウムが「アフガニスタンの貴重な文化財保護に関する世界的な世論」喚起の発火点になることを願ったに違いない。

（まえだ・こうさく／和光大学教授・アフガニスタンの復興を支援する東京会議コーディネーター）

学校邦楽教育フォーラム開催

七月二十八日に第二回「学校邦楽教育フォーラム2002」を奏楽堂で開催した。午前中に邦楽実技研修、午後からフォーラムが、全国から小・中・高校・大学の音楽教員、教育委員会関係者、邦楽教育関係者など約三百名が参加して行われた。

天皇皇后両陛下下行幸啓

七月二十九日、天皇皇后両陛下が大学美術館を訪れ、「アフガニスタン 悠久の歴史展」をご鑑賞になられた。両陛下は、遠山文部科学大臣らのお出迎えを受けた後、バルセロナ、パリで実施された「アフガニスタン 悠久の歴史展」への出品物を中心に、先史時代から近代まで多様な文化と近年の戦禍によってアフガニスタンから流出した文化財や現地文化財の悲惨な状況を伝える映像や写真などを熱心にご鑑賞された。

ご鑑賞後催された両陛下とのご懇談では遠山大臣、松浪外務大臣政務官、ラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣と主催者代表、当日開催された国際シンポジウムのパネリストや招待者の代表者のご懇談された。

大賀 典雄	ソニー（株） 取締役会議長
北島 義俊	大日本印刷（株）社長
園田 高弘	ピアリスト、 日本芸術院会員
高階 秀爾	美術評論家、 大原美術館長
野上 弘	独立行政法人 国立博物館長
三善 晃	東京文化会館館長
森 英恵	デザイナー （五月一日現在）